

阿国歌身伎之記
○宇治加賀掾門才教訓
浄瑠璃口宣案之事
○西澤一鳳の栄花物語
吉原ソラは歌(近松作)
○福田文庫位地
○名倉屋大惣

特別
15
1779



特
15
1779



阿國歌舞伎之記

附淨瑠璃大夫口宣

全



阿國歌舞伎

次嶺經云歌舞伎ハ出雲ノ神子國トカヤ云シ者
黒衣ニ鐘ヲカケテ躍リシヲ初トシテヤ、コ大原木
トイトイフ躍リ小鼓ノ拍子ノ曲諸人耳目ヲ悦ハスト
或書慶長八年ノ條云今年春ヨリ女歌舞伎諸國
へ下ル是ハ於國ト申ス太夫出雲國ノモノ佐渡ヘワタ
リ京へ出躍リ初メ諸人は是ヲ見物次第ニ能成諸
國ニ女カフキ有江戸へ名人ノ歌舞伎来リ候得共
右大將様一度モ御覽乞之御物詰モ乞之諸人
奉感

(厚半是く二枚の周白紙)

いかにおくらに申しいふははやわろくさきうたはて口
ほかにめぐりーまかみきをちを見申さう今のほむは
上るうもときとふうたをうたひやしすはうたひ
ときかせやさんとつみのひやくしうちまろ(ころ回
しをこまうかひひけれ

わかふは月にはむ雲花に風とよほまみちのこまかけて
おゆるくゆき山をこえさとせへたろく人を身
まのけやまなかくにこ回たまやしはおもひ
かゝと氣あふえはよむのちくさけこうたは夜なが

のくちをさけとよ、あかつきかたにたも口こがわておく
しやくはちはきみんつともかあてうゆか口わこのちは
又あやしきとよ考さめのうちーほれたるをみるにつけ
るしば考ばかりにとよの

慶長日記云十二年二月十三日ヨリ四日ノ間江戸本丸ト
西丸トノ間ニテ觀世太夫今春^勸進能有之
西御所御棧敷ヲ初大名棧敷アリ諸人見物群参
ス

按ニ或家ノ舊記云慶長十二年丁未二月十三日江戸
御本丸ト西丸トノ間ニテ觀世今春立合勸進能

被仰付大御所様御杖敷へ被為成上覽被遊以
將軍家ハ御櫓ヨリ様子上覽被遊以日本橋浅
草橋芝札辻、四岩札辻、神田明神門前也云
へ札ヲ出セリ其文云

来ル二月十三日ヨリ御本丸西御丸ノ間ニ於テ
觀在太夫殿金吾太夫及勸進能被仰付
候御望ノ旁可被東御見物候也

慶長日記、十四年ノ條ニ今年江戸本丸ト西丸トノ間ニ
新舞台ヲ作り猿樂アリ

而君御上覽御一間御譜代諸大名御家人御

ヨリテ列座シ見物ス名々食應(饗飲)膳ヲ賜フ云
々

又云同月廿日國ト云フ女勸進能ノ有ツル場ニテ藝
ヲ尽ス見物市ノ如シ

武邊咄聞書ニ云伏見ニテ越前黄門秀康卿御屋
敷へお困ト云歌舞妓ヲ召シ歌舞妓ヲ躍ラセ御見
物アリ水精ノ数珠ヲ被下候テ國ガ舞ヲ所覽被
成御落涙アリテ御意ニハ天下ニハ幾千万ノ女
アレトモ一人ノ女ト天下ニ被許ハ此女アリ我ハ天
下ノ一ノ男ト成事カナハス女ニサヘヲトリタルハ

無念ノ事ナリト被仰ラレシトナリ

或書ニ 慶長十二年二月十日從今日於 御本丸
西丸ノ向觀在 今春有勸進能兩御所様ハ御棧
敷諸大名ノ棧敷其役ノ知行役也但レ一周ニ付
永樂堂貫文也但勸進能ノ時四日ノ勸進錢百廿
貫文有之棧敷錢六十貫文有之一人廿錢云々ト
被仰出候得バ太史共収踊等モ尤様ニ御座候間
外聞迷惑ノ由申、札ヲ不立人ニ因テ勸進ヲ取何
レモ永樂錢ナリ、廿日支度ノ能ノ場、因ト云フ
歌舞妓女召勸進歌舞妓

或画家云此画ハ二代目浮世又平也云々ト二
代目又平也者其事跡を詳にせず、好古日録ニ
云ふ、岩佐又兵衛父を荒木根津守ト云、信長公に
仕ヘテ軍功あり公賞シテ摂津國を玉ふ後公の
命に背きて自殺す、又兵衛時に二歳乳母に懐れ
て本願寺の子院に墮ル母家の氏を假て岩佐と
稱す、成人の長織田信雄に仕ふ、画圖を好みて
一家をたす、能く當時の凡俗を写す、以て世人呼
て浮世又兵衛と云ふ世に又平と呼は謔也、画示
願家に又兵衛の畧傳あり

羅山林子曰今之歌舞妓非古之歌舞妓也、若敷坊梨園及小童樊素之流所謂古之歌舞妓也、男服女服、女服男服斷髮為男髻、權刀佩素、卑謳淫舞、淫哇唱噪、雜繩呼蟬、男女相共、且歌且踊、此今之歌舞妓也、出雲國淫婦九二者始為之列、國都鄙皆習之、其凡愈盛、愈亂、不可勝數、琴園、園入于娼坊酒肆之中、嘖諂、二百年來、益是歌舞妓、吾男、矣、上自王侯大人、下至士庶人及農工商賈、衣服器玩、声音容貌、熟哉、歌舞妓也、甚矣、俗樂之敗、凡俗也、始作俑者、毛九、二乎、噫。

淨瑠璃大夫口宣

口宣案

上卿中御門大納言

慶長十八年正月十五日

宣旨

藤原吉次

宣任 河内目

藏人頭九大辨藤原孝房奉

口宣案

上卿小川坊城中納言

寛永十九年十月十六日

宣旨

藤原吉次

宣任 若狭目

藏人頭右大辨藤原綏光奉

虎屋市ノ下

表屋喜太夫事

天下上總藤原正信

(京すめニアリ)

口宣案

上卿坊城中納言

明暦四年七月十三日

宣旨

藤原正信

宣任 上總目

藏人右少辨藤原昭房奉

口宣案

上卿中御門大納言

萬治元年閏十二月一日

宣旨

藤原清房

宣任 出雲目

藏人右少辨藤原昭房奉

口宣案

上卿中御門大納言

寛文三年十二月廿六日 宣旨

藤原貞勝

宜任越後目

藏人頭右中弁藤原光雄奉

口宣案

上卿中御門大納言

延宝五年後十二月十一日 宣旨

宇治好澄

宜任加賀掾

藏人九廿弁藤原宣基奉

口宣案

上卿萬里小路大納言

延宝五年後十二月十二日 宣旨

藤原吉勝

宜任相摸掾

藏人權 弁藤原俊方奉

弁藤原俊方奉
弁藤原俊方奉
弁藤原俊方奉

口宣案

上卿中倉大納言

延寧六年十月廿八日

宣旨

橘常信

宜任 薩摩掾

藏人頭右近衛權中將源重隆奉

口宣案

上卿菊亭右大將

元祿十三年十月廿五日

宣旨

源清賢

宜任 飛騨掾

藏人頭右近衛權中將藤原隆長奉

說經者由緒

関清水大明神禪九宮

別當 近松寺

山城國愛宕郡日暮小太夫名跡

唯重

右以唯重 依頼繼目所補太夫号仍而如件

正德二年辰九月廿八日

正滿講師

淨密講師

淨采講師

說教者

經尸

日暮少太夫唯重

關清水大明神蟬丸宮

別當 近松寺

山城國愛宕郡京日暮八太夫名跡

本久

右以本久 依頼 繼目所補太夫号 依而如件

正滿講師

淨密講師

淨采講師

正德二年辰九月廿八日

說教者

經尸

日暮八太夫本久

口宣案

上卿源中納言

享保二十年十一月廿四日

宣旨

藤原義久

宣任 加賀掾

藏人頭 元中年 藤原光綱

吉原うきはらいろは歌

近松門ちかまつかどたき門かど作

上

みのを一のとみ
付とめた歌のどうほ収

箕尾山の住持は、弟子傳覺をつれ出給ふ、所
へ道覺坊女中侍衆と打つれ来る、住持御覽ど
、今朝けさから尋るに、今きよるりと出た、是道
覺、身は此比寺へすはつた事なれば、寺の業
内はしりず、寺久しいそちたちを、手はなし
てはなりぬに、どこをあるく事ぞ、道覺みちあき聞き

今日は私が、姪共が参りまゝたゆ、山の案
内の為、迎ひに出まゝた、お目見へさせませ
ふと、二人の姪をともなへは、むゝ是が姪御
たちか、然らば身が弟、高加茂かけゆの女と
夫婦に成り結ふはとれど、それは是なる姉
葛城の前でござりまゝ、次が妹たかまの前、
あれにありまゝのが、升たけ八郎左門と申
て、家老を勤めまゝ、むゝ中々の事、かけゆ
は身が弟の事でござら、萬事頼みまゝ、八郎
左門兼り、お前が當山へおまはりおされま

十待廿字

お宝

したに付、勘解由様にし、さうく御参りな
されまゝ等でござりますれ共、先姪たちを参
りせまゝ、おつ付参り、所めにあゝふと申
てありれまゝ、いやおれは勘解由に参ては面
目がない、懺悔をすてきかさふ、先高加茂の
家は、役の行者の流れて惣領が出家して、此
箕尾山の別当に成る、それゆへ身は幼サうり
、学問の爲度東へ下つた、江戸に三谷といふ
傾城所が有、学問の隣に、ふと見物に行、高
尾と云太夫に逢つて、悪性を居した、然るに

明年は、彼の行者の一千年忌に當るゆへ、さ
うく此山へすはるやうにと有ゆへ、斯く出
家し寺へすはつた、斯様なる悪ざうまうじん妄亂の我
等が、出家すこと云々、ひと一行者のおか
けりや、八郎たき門開、

原本は永田氏藏の哉下巻を欠く又上巻も
殆どを以て遂に謄写を止む

門弟教訓

凡予一流の浄瑠璃は謡狂言の音勢を父とし草

紙の文勢を母とし修行する事四十余年四音假

名開口清濁を宗としそらず緩まらず節拍子にか

、はらず只位はかせ程うつりもちりたこび持

合引廻し色りきあたり躰用長短等の故實をふ

まへ詞地色地ふしの品をみかき流義を究む相

子は是身より出る悪心程は外よりす、むる善

心善をもつてみかき傳をもつてす、かすはい

かくて浄瑠璃の光耀音曲の冥理にかなはるか、
 差別も辨ず己が聲柏子にまかせ或は他の悪
 柏子に位をうばはれみだりに語りちらすは偏
 に本心を忘る、狂人共いひつべし又習はずし
 て草紙のふし付を見或は又聞語にするは是賣
 僧浄瑠璃と云成べし諸藝共にいか程利口發明
 の人とても口傳を受ずして道に叶ひ却至る事
 有べきや藝の奥底かぎりしられず必ほむるに
 のりず卑下をなし雲井の月貴賤の老若男女海
 中の龍魚鳥畜風雨瀧川の音迄に心をよせ猶懈

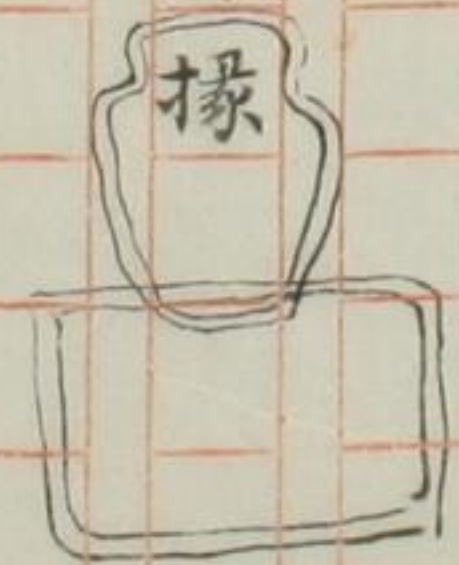
待世守



怠なく修行有べきもの也

元禄十年丑仲秋日

徳田加賀掾



此門弟教訓予六十三歳の秋認故七九集と書た
 けれどもも前々の題号の竹の縁あれば紫竹集と
 ありはす也

延寶六年の秋竹子集其以後大竹集竹葉集な
ど予一流の浄瑠璃の語様しるしぬれば今又
ありためん品もなけれども六十三に及び露
命はかられねばせめて古き弟子共に我死後
のかたみにもと思ひ元禄十年仲秋に門弟教
訓の一紙ををくるしかるを銅駝坊書林九兵
衛折節節揃新板催すの間其序にと是非望に
よつてもだしかたく加筆せしむるもの也き
れば竹子竹葉集に事あらはすとはいへども其
品心にかくる人なきにや只生付たるうは聲

古竹集序

にて引まじき所を引まはすまじき所をまは
し一息／＼に扇子をうち拍子にか、はり文
字のきゆるも假名の^{かな}にちあふもまして位は
かせもななくめん／＼の我流と云物ならんか
しかなしきかな我死して後はおれがちに成
浄瑠璃の本意を失ひ数年の修行あたにすた
らん事こそ口惜けれ末の世に此道すく人あ
らば集の断をかんがへ拍子を見がき文句明
らかにとかく假名の消ぬやうに地色詞に拍
子なき物なれば扇子打事なかれ地ふしにさ

へしげきはかしましいやし、

一藝に器用の無器用無器用の器用有器用の無

器用はなりふ覺おぼへははやく忘わする、事又はやし

これ無器用にをとる也無器用の器用はなり

ふ事をそけれども忘る、事かたし是誠の器

用也人毎ごとにす、む拍子とたゆむ拍子有す、

む拍子はさしあたりよきやうなれどもゆう

なき故まわるしたゆむ拍子をみかきぬれば本

間の拍子まになる是をゆうのある藝げいといふて

よし勇力ゆうりきの人はす、まづたゆまずおどろか

持世字

ず武藝ぶげいはもちろん音曲筆おんきょくの道みち皆同断とかや

一藝の下手へたにかぎり人のそしるを立腹りつぷくすこれ

あやまり也口惜くちおしくはなど修行しゆきやうせざるぞそし

る人は我身の師しと思しひそしらす、所ところに心を

付常つねによく修行しゆきやうし合点がてんゆかすは尋聞じんぶんべしと

ふは一人へのはちとはぬは萬人への耻はぢなる

べし

一浄瑠璃は段々長き物たとひよく語りても教

段の中にて只一字じあやまりては能語りたる

にありず千ばいのうるしの中へ蟹の足一つ

入とやらんなるべし
一節付しやうを便りに語るは大き成ひが事そ
れにて成事なれば謠の本程委細にしやう付
たるはなけれどもならはすしてうたふと云
ことなし先わけしらぬ浄瑠璃を聞に平安城
の道行なればほたるもわれが身にそひてと
語る内に四所持有予が一流には一所ももつ
事なし是皆悪柏子のなすわが浄るりはかた
らでしやみせんをかたる成べし地くばりに
よりもたてかなはぬ所こそもつべけれ謠も

在在字

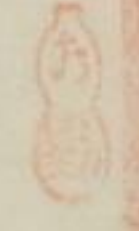
下手のうたひは芭蕉の曲舞なれば水にちか
きろうたいはともちうたふ是皆習はずして
生付たる悪柏子のなす所是にて思ひしるべ
し
一位はかせは上一人より下万民一切の生類風
雨水音迄にある事也程と云はそゝらすたゆ
まず是を本間柏子と云うつりとは柏子より
程に移り程より柏子にうつり地よりふしに
うつり外の曲より地にうつり地より外の曲
にうつるをいふもぢりとは柏子を程にもぢ

一 持合引廻しと云は地ふしにある事也或はふ
 し送りみさほはとゆる所みさきにすゝめど
 もまた曉あかつきのと語る所皆是持合廻し程うつり
 もぢり也雲のまゆみほのかにても同前鏡
 山又しやんと立たるみかみ山皆定るふしな
 れ共文句もんくがふしをもつ文勢ぶんせいを母とすと云に
 て合点がてんせらるべし或は又スヘテ文勢にてま
 ままかはれどもゆきかたはかけらかはらず此外
 一 我幾年語る数百段の淨瑠璃いづれか易やすしと
 思ふはありす中にもむつかしき段八曲きよく有一
 小原御幸二身延三菅丞相四松風五明石卷六
 花子七草刈八葵上是也
 一 寸べて諸藝しよげいをたしなまんに酒宴遊興しゆえんゆうけう色欲しきよくに
 ふけ他念たねんありては中々上手に成がたし只一
 心に真道々に打なづみたとひ月を見花をな
 かむるとも道の心をわすれず寝ねても覺さめても

持世字

一 我幾年語る数百段の淨瑠璃いづれか易やすしと
 思ふはありす中にもむつかしき段八曲きよく有一
 小原御幸二身延三菅丞相四松風五明石卷六
 花子七草刈八葵上是也
 一 寸べて諸藝しよげいをたしなまんに酒宴遊興しゆえんゆうけう色欲しきよくに
 ふけ他念たねんありては中々上手に成がたし只一
 心に真道々に打なづみたとひ月を見花をな
 かむるとも道の心をわすれず寝ねても覺さめても

由断ゆだんなくしてこそ他にすぐれめせつなのげたい懈怠
 は一生のげたいとしるべしされども悪には
 りつりやすく善にはもとづきがたししりそ
 くものは大海のごとしすゝむものは一滴の
 ごとしむへなるかな
 一一生夢のごとしといへども修行の間を思へ
 ば年久し既にすて我十七歳の春あはれ世上に名
 を發する藝をあたへたべと三十番神へ祈誓
 をかけ年来諸藝の家に入し其道々を見聞
 に丹誠たんせいをつくす者にも其家の子なりわば秘

待世字


事を傳へず然は望たりぬべき頼もなしとて心
 をつくし修行するなりばたとひいかていかけい躰の藝
 にてなりともと浄瑠璃に心をよせぬれども
 ならふべき師なしたとひ師なくとも音曲の
 法を守りうすきをあつくしをもきをまもかるく
 しみがくに甲斐かひのちからんやと思ひ謠狂言
 或は平家舞小歌迄の音勢を窺うかがひたゆむをす
 るめそゝるを引しめ終つゆに我一流の浄瑠璃と
 す親類しんるいのいかり朋友ほうゆうの異見おけんわらひそしると
 いへども念願ねんぐらんむなしうせんやと難行なんぎやう苦行くぎやうし

四十一歳にて京都に出芝居を取立今年二十
四年つゝがななく相勤む道に達せしとは更々
思はねども或時は高位高官の御前に召前代
未聞の御褒美に預り又は國主佛者儒者音曲
者にも謗をうけず愚藝といへども他念なく
つとむ故佛神の御あはれみと有がたしかく
のごとく多年まがみはたきせんじしぼり修
行し浄瑠璃の難病を治する薬方ををろかに
し法にもあらぬ毒をこのみ或は自身手合の
悪調丸をもつて刺予が直弟子と偽る者世上

持世守
あ

にはびこると聞是則賣僧浄瑠璃と云成べし
しかはあれど弟子にもあらで弟子と名乗も
予が面目にもやあらん聞人御ひいき頼入存
候以上

福田文庫の位置

浅倉屋の今の老人の、祖父の頃からの得主^花
で、老人の代とふり、九十歳近くの老作にて
下駄かけて、代々^木がら、珍^本一^冊を^予ら
しきに包み、折々賣りにこられ、流^行版の方が
便利で宜^いいと云つて、洋装の^身と交換して
販^られた。

註 本来珍書好で集めたものではあかつ
たか、やゝ疑ふき能はず。併しあつゆるも

のを集めてあり、所を見ると、マアさうでもない。
あさそうでもない。

中々元元に見受かりしなり。夫より(時代不明、明治三十二三年頃か)青柳にて、初めて珍書會を致し、元禄堂(吉金)が、三久と主催して一二度珍書會を催したる事有之、其時の出品が、福田文庫の品にて、元禄堂が折々あり、會へ出したらあり。

具原の家は、代々本の農家にて、私に一二度参りし事有之、郊外劇変し、只今

には、以前のと違ひ、方角も不知、まことに夢のやうにあり、せめて日記にも有之らば、何か分り可申しへとも、震火にて不残焼失致し、只記憶は青山六道辻を、車にて参り畑中の家と存じし。

福田文庫本には、あることの字が捺してある。

又尤の紙片は、予が千尋大和織四六冊、(半紙本)を購入した時、知ひる大和織六冊成辰九月十六日求之とありと見て、これぞ

く福田氏ありべしと思ひ、ゆかりく思ひたれ
ば、取重たり。 今存福田文庫の右に、
下記あり、或は「茂元弟白」おどいひしか、これ
は実事あることいふまでもあり。

10
20

云々
云々
云々

日公
カ
リ
イ
チ
ホ
シ



新刊
傳
書
小
説
史
論



秀非在自公
 水谷様
 中務根
 二九五二
 東京市
 中

昭和七年五月五日

東京市淺草區北仲町五番地
 文書閣 淺倉屋
 吉田久兵衛

振替口座東京二一八三一番
 電話淺草二四三一番

Faint handwritten text, possibly a signature or address, written vertically on the back of the envelope.

Small handwritten characters at the bottom right of the envelope.

Handwritten signature or name at the bottom of the envelope.

新刊傳體小説

相好快事一御見立
普流得事年可思
只同介一初日更序

表紙には大野屋惣兵衛目録と記しあり
記憶すれ共何んかの誤り記したるもの存す

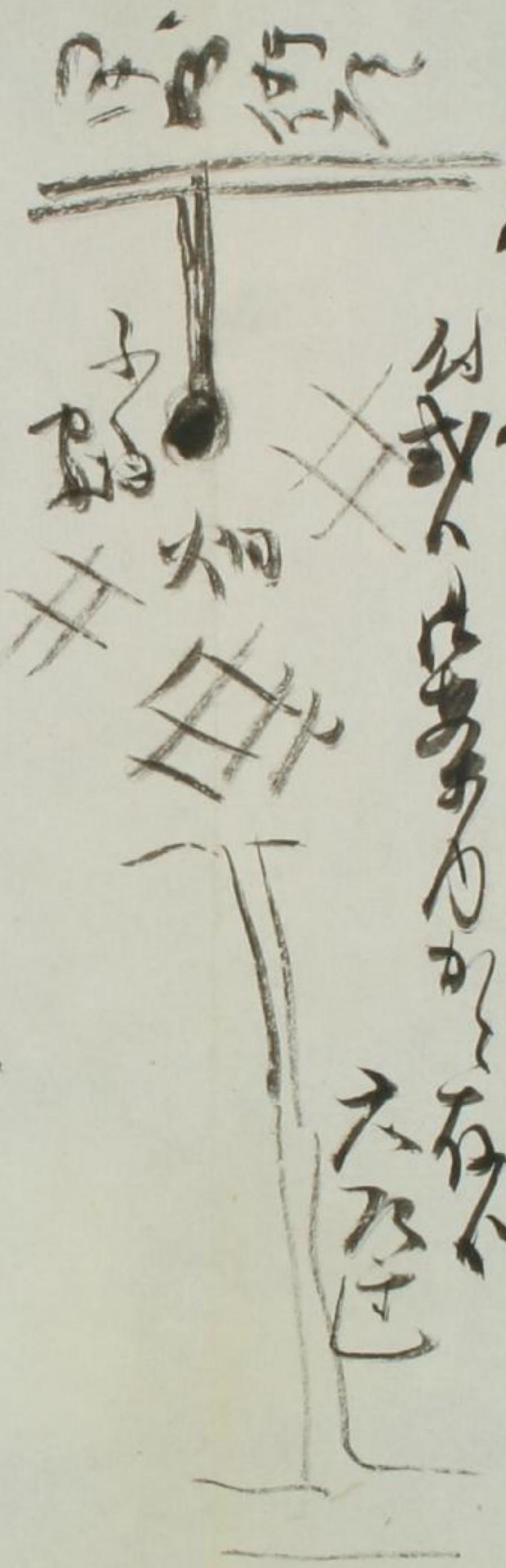
好砂吹雪一御及屋を交
昔尻鼎早身命多し御心
は同介一初日又神一也
祖公所公大はたき之事事と
取事多し志多易し子安方と
只今とわぬと名後悔候は
且し清式大頃味暗はは同事
と云ふと大い同候は其如候
心願相掛あり一と云ふ事
守之此のたて九千六百と
其代あふ下結かけをて以未
不好中世一と冊とわろ
と志書一は初結成法相は方か
傳利て与らぬ事一傳也む
中交獲多し元と云はは
と書成中一は元氣あるは又
中一書が抑を踏あし跡を
到る所の元禄をた無らんと

二日... 打... 个... 上... 之...

三白

少... 过... 烟... 村... 子...

法... 自... 路... 走... 为... 勇...



一... 心... 不... 解... 事... 及... 用... 拾... 之... 数...

立... 心... 年... 一...

法... 心... 年... 一...

水... 火... 样... 法... 心... 年... 一...

祖之は公女はたき事
 敬事もき名もあふあふ
 只るをみても後悔は
 心

坪内先生の需に當りて名吉屋

大惣の事を記し送り一文

○大惣は通稱大野屋惣八

當主は陸軍歩兵大尉江口均氏、其父は惣太
 郎と稱す。均氏長兄は惣吉(鼓の名人)など個
 人の名は多し異なるれども通稱は大野屋惣八
 なり。早大図書館に藏せりる大惣年目録の
 表紙には大野屋惣吉情目録と記しありや
 記憶すれど何んかの誤り記したるものな
 り

○當主均氏の亡父惣太郎は、巧しく私と同生
 年か一歳下にて名古屋に存し一時々の知
 人なり。私の母は七八歳の時は長者所三丁
 目に家し、大惣は長島所四丁目、僅かに二
 丁を隔るのみ、殊に私の父は讀書子にして
 常に大惣の花客なり、私は其借出の使に
 殆ど毎日のやうに往返すやうなり、其家人と
 は最も親しく、東京へ参りたる後も、讀書
 生となりてからは、其藏書を送り越させて
 見ることを得たり。然るに惣太郎は明治三

十年に死去。其後彼目錄を調査し、初めて
 先生へ交渉せしものにて、先生より私へ序
 文撰ありしは明治三十一年九月廿六日あり
 き。當時大惣よりは総てを金三千円に譲渡
 したる由申出し、返書ありぬ。程なく同仲好し
 名古屋へ参り、大惣の土産を致したるが、
 翌年同年の秋より、初冬の頃かと存すい
 其時先生とお別れして、私は親戚の家にお宿
 りした、大惣の氣族にして同家の代表者来
 り、私へ臺却方を依頼したるに依り、大畧

兼儀致し、故平後種と尽力せし所、向もな
く目録の返却を申さず、に申り便にやうに、
二三月経ちて、一日吉川半七の代理とし
て武田傳右衛門来訪、今回大惣を考詰さ
川半七が譲り受けし由を、當時も自分方に
淨瑠璃丸廿百冊ばかり、傍覽しやうに、
大惣の仕度をして、後者の引渡しを申
出したる、全部之を引渡さうなり。此
向一言の取扱はあらず、甚だ不都合な仕打
ありとも、後で聞けば、親族某が中間に

立ちて筆を弄したるが爲にて、大惣一家は
何も其行儀を知らず、且縁定の三千田子
もあらず、其手にう僅は二千田子もあ
らずといふは、おこした同傳をくまらう。
吉川もくも買直段は遂に明言せざるも、讀
本、草紙傳、人情本、名玉國會、隨筆及び
名古屋に關する地理書字本等を除き、二千
五百田子を手打とあるが如し。

○名古屋に關する地理書といふは、猿猴菴

高訥が、尾張の年中行度、其他神社の奉禮

、寺院の図帳、山車、造り物、行列等當時の風俗を写生画とし、新色を有したる回書（書）の草稿等、其他複写本等を有り、尾張の名所相（相）の御数十部あり。其複写本として、小田切若江、十寺玉鬘等の筆跡にして、名古屋に在りては得がらき珍本たり。私の大正六年十一月、其残本全部を譲受けしは、大徳の家族が、前の行儀（儀）を顧み、殊に私へ好意を寄せしに因る。西（是）より二三年前、右残本の事に就いて、大徳之趣きあり、

然るに大徳にては、別に名古屋市役所とも交渉し、史編纂係堀田璋左右氏は、之を買収しを参考に資せんと、市會に議りしも、市會の容るし所とあらふかつたので、断念することになりしが、一時は私と競争の志にあつたから、私は手を引いて御座した。之が爲に同書は、四五年放棄されてたのを、大正六年十月、前の行か（り）から、私へ再び依頼あり、一千三百五拾圓にて購入することあり。

○私の七八歳の頃、中島町傳馬町の西角、京口屋九兵衛とり小醸酒家より出火し、南方一町余延焼し、其^中頃にあつた大惣は焚焼したり。此時土藏一ヶ所焼失したるが、なほ土藏二ヶ所焼失を免れ、又藩士等馳付け取出し運ひたる爲に、本は割合に焼失せず、殊に古版類は、二ヶ所の土藏にありし爲、殆んど損害を蒙らなかつたと云ふ。

○たほ私の後に買入小書物は、別冊『名古屋大惣』残本目録掲載のもの也

小倉百人一首

大總
貸本

十三

書尾州名古屋
大野屋惣八
長嶋町五丁目

書尾州名古屋
大野屋惣八
長嶋町五丁目

大

長嶋町五丁目
大野屋惣八

大惣
大惣

大
さ六百拾六番
全部六冊

長嶋町通六丁目
書林大總
大
三十三冊

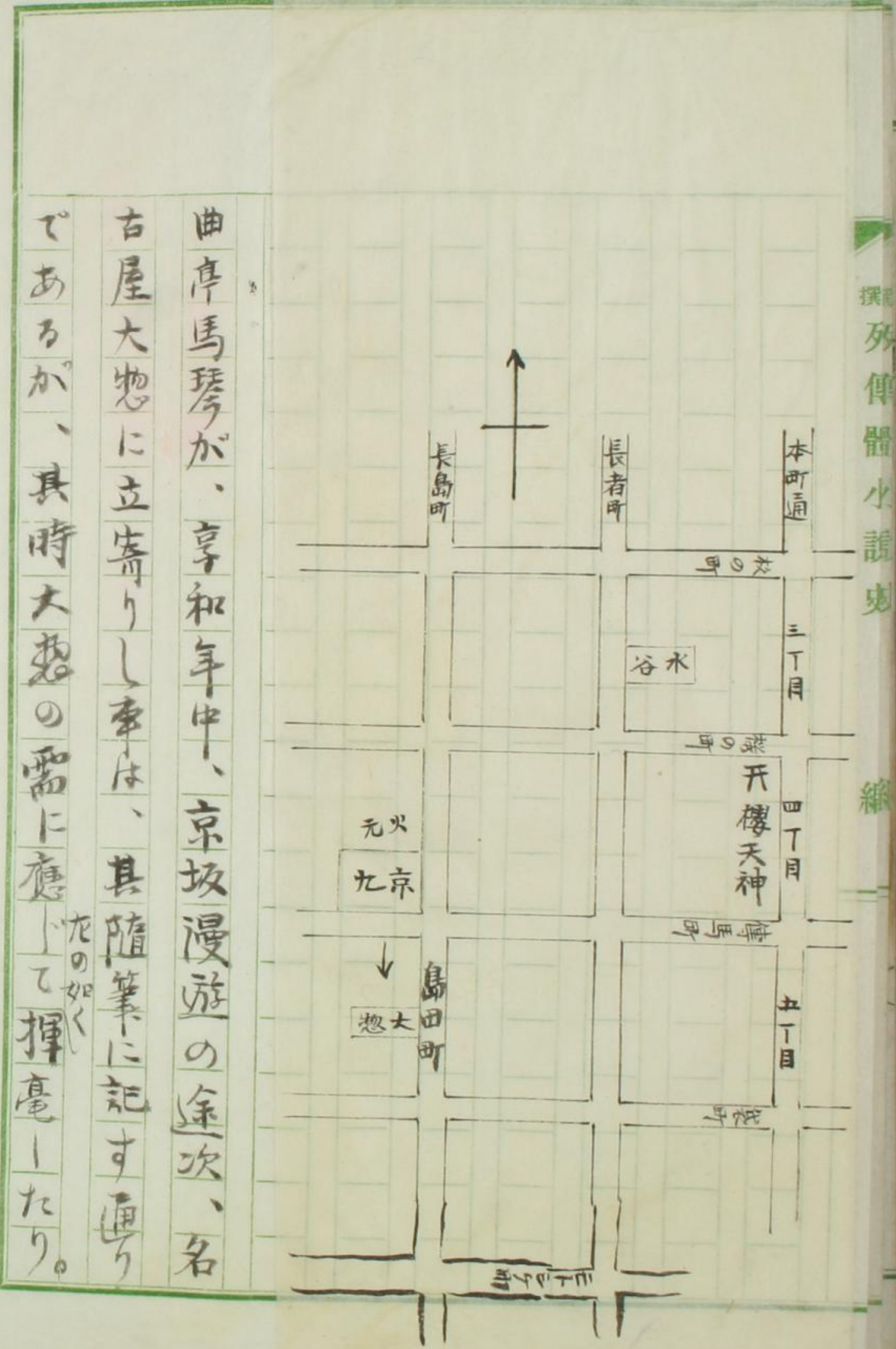
大

書
受知縣下名古屋
長嶋町通六丁目
大野屋惣八

大惣の藏書印

新刊集書小蔵史

編



曲亭馬琴が、享和年中、京坂漫遊の途次、名
古屋大惣に立寄りし事は、其隨筆に記す通り
であるが、其時大惣の雷に應じて揮毫したり。

○名古屋大惣馬琴の遺墨(額)

古人琴書酒の三を以て友とすを知らずは下戸
おめいゝとてさそひ給はゆるに苦をせしてやぶる
品書のみ先踐となく友とすに堪え給はんとす
ども又お頼りも往々得がたき事ありて苦候お苦し
むものあり夫一日雇の女房泣きさやまの十日
切のか一本枝葉のまらひひし尤かりて換のゆ
かきものゆふまの夜あめればかき

代お頼 胡月堂主人

江戸 曲亭馬琴、識

又の家ノ屍凡子丸の大黒楚(あ)

是に徳元のおりしをまゝして多岐推元の伴歌
もふかちく袋はよみ井上はおはるかとうたひ
中中子使元の西園寺丸し子飼の白ねみち
うつらとといはよりお怒の淵ぬつと色あけま
ひげ一即ちそのま心をうけいそむお福もまの太
神宍

右大黒楚

曲亭馬琴撰

○元禄太平記

元禄十丑年三月三日

寛永正保の古浄瑠璃正本

明治四十五年の春(此年大正と改元)の事であ
る。私が繪入浄瑠璃史を書かうとして、種々
繪入本を蒐集してゐるが、井上播磨以前のも
のが、思ふやうに集まらず、一時停頓せざる
を得なかつた。尤も此期間の繪入本としてほ
、彼の柳亭種彦の用按察に出てる上り八島
下り八島、寛永八年版の「かや及びび」さん
せん太夫の正本、又京都伊豆小三郎氏の藏本

等、多々ないが、併し之だけでは問題とすらに足りず、然るに偶然にも寛永正保の古浄瑠璃三冊を入手し、不十分ながら此期の間の記事を進め、表の出来たのは、実に物怪の幸であつた。其古浄瑠璃とつめは、

はなや

天下無双薩戸太夫正本
寛永十一年四月開板

安口判官

寛永十四年六月日

あかし

天下一若狭守藤原吉次正本
正保二年五月日

の三種で、之を得た時の嬉しさ、鬼の首でも取つた時の心持——経験はふいが、であつた

。薩戸太夫の事は、声曲類纂等にも出てき、誰も知る所であつたが、併し寛永十一年に、天下無双と稱して正本を發行してゐる事は、未だ何人も知らざつた所。又安口の弓継のなど有名な古浄瑠璃であつたが、其実物を手にする事は之がはじめてあり、殊に若狭守吉次といふ太夫の存在を知る等新発見に、我浄瑠璃史に取りては、資に貴重いづれも資料となつたのである。加之、讀んで行くうちに、紙の間に何か書付らるゝものが挿んであつた。よく

本屋の古い受取書などがあつた。多分
そんぷりのあつたと扱いて見ると、受取書
ではなく、半切形の落葉に認めた目録、即ち
九の如きものであつた。

一 薩守太夫正本 はふや 寛永十一年四月印本

二 安口正本 小袖曾我

三 あくちの判官 寛永十四年六月印本

四 いづみがじやう 寛永十三年八月印本

五 待賢門平治合戦 寛永二十年卯月印本

六 一の谷逆落 同 年九月印本

藤原吉次正本

七 きよしげ 正保二年二月印本

八 あかー 同 年五月印本

九 こあつもり 同 年八月印本

十 よりまさ 同 三年二月印本

十一 はかた 同 四年正月印本

十二 佐渡七太夫正本 あみだのほんぢ 同 年六月印本

十三 友原孝次正本 説經一んとく丸 同 五年三月印本

十四 ゆみつき 同 時印本

十五 いけとり夜うち 寛永二十年正月印本

此分前に書落故印之

十六 江戸伊勢島宮内正本
かほの御ざし
慶安三年正月印本

十七 藤吉次正本
とうだい記
同 時印本

十八 江戸七郎左衛門正本
清水の原本地
同 四年印

十九 お収ゆり
同 年九月印本

二十 わらいくさ
明暦二年十一月印本

此所書損奥ニ印

廿一 説經佐渡七太又正本
にち小んき
兼應三年四月印本

廿二 さんせう太夫
明暦二年六月印本

廿三 大政二郎兵衛正本
わらいくさ
同 年九月印本(重出)

廿四 小ざし
年号未見

廿五 左内正本
ともなが
寛永十四年雨月印本

廿六 こ大ぶ
同 十八年五月印本

廿七 藤原吉次正本
四段より六段まであり

阿弥陀本地
同 廿一年九月印本

廿八 江戸伊勢島宮内正本
四段より六段まであり

ふきあけひてひら入
慶安四年九月印本

廿九 山城佐内上るり正本
四段より六段まであり

ふせや
年号未見

初段より三段まであり

三十 右脱本四品合成 一巻

以上二十八集 廿四冊 一巻入

右は私の入手した^つはあや以下、二十四種の
 目録であ^らか、多分藏書家の筆跡であらう。
 私は突に驚いた。無論驚喜ではあ^らか、既に
 貴重の本を得た上に、此目録が附いて居て
 、私が穿鑿しつゝあ^ら事實が、次ぎく^と究
 見せらる^しと云ふ。何れ^も幸^な降^り私
 は恵まれたのであつた。私の^舊入^降り^史の
 寛永から明暦までの記述は、右三種の正本と
 此目録とに由りて編成されたのであ^ら。若し

^つはあや以下の三種を得ず、従つて此目録を編
 目す^る事がなかつたなら、或は淨ちり史は脱
 稿す^るに至らなかつたかも知れぬ。昔あ^らば
 清水の観音の^示現でもあ^らるな、私に取つ
 ては眞に奇跡的であつた。

するにても斯の如き貴重の珍書を、二十四
 部一箱あ^ら澤山さ^らに所有一^つのみた^人は何
 人であ^らか。其水を知りたく、既に其三種が
 自分の手に入ったのであ^らか、恐^ろくは散
 りく^りに分れたものにお違^ふい、其片割れを

発見すべく、丁度扇の格で別れくつにあつた、安斎翁王が、母師臺を慕慕少が如く、又は親の款でも撰すやうに、雨未教年間、其行衛を撰しそめながら容易に発見すべしとが出来る事にかつた。

私は京来裏打本が嫌ひである。私の手に入れた三種共、別に汚損はなかりが、皆裏打がして、元の表紙の有無は知らぬが、悉く一定の表紙に改装されてある。所から、他もすべてさうであらうと思つたが、私は此裏打を利用し、

表紙も改装のものや、元表紙のやうに黒表紙に改めた。そと取外したば右や左の表紙と、其藏書家の手に成つた目録とを保存しと、之を證據に爾来、此一組の珍書の行方を物色しておたのである。其目録と表紙とは、此稿の末に附してある通りであるが、其後永田本中に「小袖曾我」一種を発見し、又東北大學図書館本中に「吹上秀衡入」を、都合二種、表紙改装の趣から此一組のうちのものとして本が判つたが、其他は依然知りず、其うちには同一表紙の

改装本に、

太平記十八巻目

一

享保

山本九兵衛板

大隅川源九郎門

一

貞享

平屋嘉孝門板

富貴堂我

一

元禄

山本九兵衛板

等の繪入本が手に入った。併し是等は半紙形で、更に後年に属するものごと、以上二十四部の一組では素くはないが、此種の繪入本も多数蔵してゐた事が判かる。まづ、^{蔵書家の}何人も、かを尋ねたが遂に知る事が出来ず、^{其後}大正十二年の大聖火災あり、かゆて探

索してゐた前記の片割れも、よゝ何人かの手に保存されたところも、此時多分燼滅したに不違ないと、慟く諦め、それかゝところものは、此一組の古浄写りの本は、殆んど悉くてゐた所、昭和四年八月七日、村口半次郎氏から来書あり、何かと披見す、と、前記一組の残り、とりよゝは其主要部が、発見された事であつた。即ち其手紙及び目錄全部を裏に附して置く。而して其発見された全部が、安田氏の手に入つたと云ふことを交した。之で

安斎新王の所在も判り、優曇華を見るの慶に
接した。其後聞く所に由ると、安田氏は此う
ちの主あちものを、稀書複製會の手で、西復刻
せしむ、之を弘く世に布くの企ありと。私も
はふや以下の三種は、大阪毎日新聞社で、金
平本全集刊行の際、之を推薦して世に行ふこ
とに微力を鼓した。之で此稀代の珍本が、右
く世に知られ、古浄るり研究上、貴重なる資料
として認められたのは、重由く喜はしき限
りである。

三馬舊藏の浄瑠璃本

何年であつたか確と記憶せず（明治三十七
八年の間）麻田書店から、古書入松下見の案内
を受けたことあり。其時予の注意を惹いたの
は、式亭藩藏の浄るり左本約五百部であつた
。尤も之が悉く三馬の藏本であつたか否は詳
びないが、兎に角、其迄半は、例の改装本に
、^{一三行の}達筆で大きな書入あり、近松以前古浄るり
を合み、二百餘種に及んで、実に貴重なる蒐集

であつた。予は無液携く能はず、是非買ひたい
と思つたが、少く前藏書の一部を賣拂つた程
で、之を買ふ金がある。新多社の會社に計り
、差し落札した所には、百田借りる領解を得
て、金尾文園堂に其入札を頼んだ。

當時此争り存に計り、一の控後が傳はつ
てあつた。其経路は詳ありか、此本は是迄度々
持主が^が変る、そのは此本を買ふ者にはケチが
附いて失敗する。前の持主も失敗して賣物に
出した^等、そんな噂で好い客があく、已を得

ず入札に附する。そこにあつたと云ふ。化あを
おを買ふは、安く落札するものと見らるり
、當時の時價は近松の四十五、普通は丸
本は十銭位であつたが、平均二十銭なり大
丈夫と多寡を括り、百五円を入れた。所が高
札は百二十五円とか麻田に落札し、北濱の^西
田某の手に歸つたと云ふ。跡々聞けば、此丸
本は西田氏の注文で、やがずの札が入つてあ
つたと云ふ。某は^西中田家の養子であつたが、
其頃風向がよく、古書及學をけりめ又藝妓を

ひやつりあり。うちに不首尾とあつて、養家し
向着をせり、此丸がも程なく手紙ゆはふと女
事にあつ、此傳説に裏書すことにあつたが
築根の西だけに、今度は大阪圖書館が施
主として、其書庫に納め、そこにあつたので
、最早此丸存も、中々に達ふこともなく目出
たしとつあり。こほ徳久平にあつ、且傳
後にも少なりたか、序あるは記し措く。

○當世采花物語

初編より
六編まで

西沢一鳳編

本書は大阪殿村平右エ門氏の藏にして故西
沢綺語堂孝史の編す。所序乃か目録に見ゆる
加如く近松以来の世話浄るりを佳き其し
り一に短き評註あり、浄るりの本文は浄
るりた本あるは男一つ其序文、評註及
び目録をこゝに投せ平しおく

當世采花物語序

伊勢物語は傳説の妙を浮たし書なれば我

国の室より是に継ては清女々枕の草紙の赤深
が草花物語之は書始也継物語と有て他の
作物法とありり摩母の神ふ天を降る可なく
るし衣裳のいろ調成の莊おむら(装)言後の様
其代の趣を尽したるは古くの語まとよまき
るまとよまきに元祿くの比也年豊年
の梅瑠璃の中ふ近松西沢文信阿音等々
作せし又を見ればはかなき世法の作物法
とよまきといふ言後のさま調成のふ衣裳の色
までその頃の男女の癖情趣を尽し其頃の一斑

をみるに足れり伊勢傳の枕草紙をよむ
百き方この玉糸物な少は甚書と遺水といは傳る
り那とは総の遠り前も撰物うて細山子に仮名
の平なく遠るゆづいめく平の破れ損りて
其の柘のなりんを携りの佳の帯を棄てて
其のの標文をせんまし文を仰しの帯をかき
其作の段を撰書集て後に甚評を著す其
々のありぬ男女の癖情を記しめ歎つる
遠の無のはまとよまきのお節と那て外題
を思ふ癖作物法田舎傳は那はとよまきに呼て

今秋草花とては花はたききり思ふもおもく
 昔年の文の近かりんとの意をもて当草花
 花はと踊るに花をばはに弘めん中を思ふ
 のし

西沢鳳軒本史述
 維時嘉永三年庚戌冬

當草花物初掃六掃日月録每輯三冊

<p>但馬やお夏 多代清十郎 万石おちか しまつや治市 及是やおちか 助信は作</p>	<p>哥念佛 梅田の心中 卯月の潤色</p>	<p>但馬やお夏 多代清十郎 萬石おちか しまつや治市 及是やおちか 助信は作</p>	<p>昔采万石通 長所女腹切 外月の花</p>	<p>付心法 井原おちか 甚あみおちか 村小十女 十所や治七</p>	<p>廿五回忌 阿波の鳴海 海の鯉出共の沈花</p>
<p>三河おちか 平次おちか 大仔おちか 多代おちか 三河おちか 下女おちか</p>	<p>曾根の心中 志八卦柱磨 今更の心中</p>	<p>三河おちか 平次おちか 大仔おちか 多代おちか 三河おちか 下女おちか</p>	<p>廿五回忌 阿波の鳴海 海の鯉出共の沈花</p>	<p>井原おちか 甚あみおちか 村小十女 十所や治七</p>	<p>廿五回忌 阿波の鳴海 海の鯉出共の沈花</p>

ハクセキ目七 ハクセキ目七 ハクセキ目七	忠の御梅	侍やゆき きのこ丸十春	心中天の個嶋
つちや梅川 加ゆや右系 ゆやおまの 丁推久去	冥途の病所 袂の白紋	長衣丸弁 長衣丸弁 国の十より 丹波より	心中三投傍み 待夜の十室
栢尾おまが 赤尾おまが ハクセキ目七 ハクセキ目七	生玉の心中 心中二腹帯	栢や久と 丹波や梅山 ハクセキ目七 ハクセキ目七	栢久まの栢山 心中雪原身
ハクセキ目七 ハクセキ目七 ハクセキ目七	男色加茂侍	成田金と 成田金と	心中万草草
山考と 山考と 山考と	赤竹の門松	山考と 山考と 山考と	き 帳子
ハクセキ目七 ハクセキ目七 ハクセキ目七	元代 心中衣	ハクセキ目七 ハクセキ目七 ハクセキ目七	心中扇の玉井
ハクセキ目七 ハクセキ目七 ハクセキ目七	廊の色指	ハクセキ目七 ハクセキ目七 ハクセキ目七	心中の障子

毎輯二條を三巻として以上三千六條次は六御座に出ス

評註

○昔采万石通 是言保十己年正月二日

豊中麻前女掾高舟上野女掾座を西に瓦

田中千柳の作す今嘉永三戌年まを百二

十六年ある。古澤瑠璃

評に曰 湯髪長き 放駒長去の狂言は是を

始として後廿五年後物本流はて寛正二年

四月十八日一 双蝶々曲輪り記とて山崎与治と

し一狂言子一取但て以斗湯髪放駒とも角力

取しと思ふもは後の新所をみすの要法あり

丁金にたがひ向ふ事なす一少地を高月草めり
那かやくと所い書ほやせしゆく申し書し
思存又十公申後立丁金に在て田楽石の石
見し是し出たし明るてたやしゆ格も書
元後をハ情くおや一太室ち所米石のまぬを姉
のち関ア一し書後強弱の色気をし崎と書
あかめたし双博したれと振りし申し書
の有て心算は氏狂言子るしつちが米石仁
を留よのせりふたは比の盤朴なるし見
井智のせぬそ居るぬの及行はおる也

及行ゆへり上たし作高草一観音寺同儀
と比後有て事有及書ら石は廿五平一前元禄十二
年九月に錦文流の名文有はけ及りのまを
かり同儀の道勢を迷たしな
○心中を井筒 とき宝永元申し平四月十六日
り昔年箱後掾池を直松門たつ作りし
今高永三成平一四十七年一子成は二年前
曾根河平年を直松せしを直松浄らりの始し
評に曰 付石の場しんは深おるしをのくし
け比の流りをししは在言み限りし直松浄

瑠璃をばきりくゝりて——と云ふ物を書又乃りて
まうくもいし声なきおほまおて流るるは流るおめ
是を述るるを心やうしせしおのふ中よりつて各
とて河をいし今より江の河のめくおむるははは
やう云い河のち——中の流るる大曲の麿ん有
いと古きなり乗おめ——又云お所と云い比
今のあま物を始てかきし——物は是もまたたは
の川申物と唱し——と思ふ。持るる所も古名し
那うて今の酒也所りはまたたつ所を有なり物
るりの文中に現げぬど古く人形もいし仕事

るい尺ゆい流ぬ及もいし——といふ成を流し
しりたといはしる是色市巾の現らなりおめ
一服をすまの好なり——定ぬや——中山之七
（髪巾や金柳と云）集筆真園本抄九に押の紋
おめを流しはしる帯外をそれを見
物にあらまお成つおぐ——と日数三十一日斗り
豊川のゆい流筆市中のおめのことなり帯のお成
と相の紋おり——と云程はやり——とあり
とてお中一の区違もかこい筆——乃行に鐘し
八りがせらのまらと云い今は早昔と云い花園

将門傳承も其改名等の御孫の名を以て
て少少の周よりかり圖より那まると仕年
ことをはえのお七の文句に都て文句つてまかにして
浪のさるる月なきし今時の在りし加わり候事なき
る空況は其の如し始はる末階を川田常の方
へ行くには一刀をさし行人袋をさき井名の三階
あり早編着るをせしは治アまの刀をさしもあせ
せかひ段少くする多あかたを所得在る
傍にさしふし其何れせよ其治仰るるの文
き中まもすくし書た。文をさすくし味ひ

感出すは右又ありなり (以上神一)

○長町女腹切

はえ祿十二年正月六日
竹平筑後椽座より近松内をまゝ作し嘉永二年
まゝなるなり一年し成り

評に曰 刀屋石貝の刀拵尽し是より限りぬ事
あかす御たうお花伯母しりしありたり上二城の伯母
耳もを何れなき及所師の坊くはありおこ中の巻
長十郎が流金子は比を一年極めりし嘉永
右段へ下り一申よりし流りしといふ阿弥院の
えも古きし流りしといふ一丁物を坊岩尾し候は

昔よりが任事さき一門あつたなり一余かゆては
狂言をよみ候えさくし思へし着物のりては
こは切腹のあつる一礼を産めらるは笑おや
おしとてれお下思ひ捨たり女の大肌ぬきて腹
切たりお下一から

○井筒屋原六之助 是實晒 是享保八卯年七月六

日一豊井越前探丸を西た瓦田中4押の作
に一今喜永三成年まひ百廿八年の成。

評に曰 井筒屋原六之助は比所を砥積館の
親を責お行し時の高き人といふ名なき人

外懸にかりしと思何の中の危宮^お回りは及前心ま
書伊弉耜及志摩御孫由良太史の坊は比八
外太史の坊を尊し一と女腹切の伯母と隠し
せたりもの之下の巻御影畫のよの唐かぬ後原
御殿太史太史の昭宗有坊は比のほやううたに
訊ひはやせしとて一街八十之進おおし
原六の意あつた一を云を井のはたを原六
原六は原六の意を何十考孫をまつて南かも
のた方と意にまたおや一ある年のぬと云
の仕はは越るをわし一おしお代へおふおし

中へ出掛けませしこの文を物系とすべし物所の
 移り思はず又下を物所の太北友とはは甚阿弥
 の北友のまかぬ物へ引かけ一文のわりの物
 ちやう物系を物所とすべしとあることある。ちやう
 都て安治物の中へ狂いの中へ是れ中へ危下
 の危をも有りぬん類ありきとて取らんと
 して

○お那津 五十一年忌歌念佛 々宝永六丑年正月

二百一十本座まで直松門たすの作まで今川
 判詞の條目の切狂言之是れ五十一年前宝永二酉
 年正月廿一日より日産までお夏清十郎位物狂
 と外題を呼びて廿一評よりけいば五十一年後
 のお念佛と外題を記しては本おゆう 宝永六丑
 年より今嘉永四亥年まで百四十一年と成る
 五十一年前おゆうは萬持三子年のもりよりして
 百五十二年の昔話之書物中へゆかりありて

は古き御一限りなきものとてあるなり

詳者百四十五事一前重井尚持のりの枕子のき
志いらふ字を金しやでいせせ祓ん唐十郎し
おた下し其比けやうしし寄をせり極新色
娘扇和泉国浮名の留地たおりもお夏侍
十郎しを作りあゆを皆是く後の仕終りて
は寄念佛の名をかりたるおたり

次に世す三勝半七が位身々元禄八亥年十有
七日の朝午日の差而るそのるこは赤のくみり
は余が作傳奇作書に續御に出せばはるに

略す元禄八亥年一より宝永六平一までは十三年
とあり然し其外題の二十三年一忌と有
其外は世にうくしりたるものなほ十三年一
廿五年一回を返越したるおしおるお夏侍
十郎五十年とらふも然と其十年一せん
るもの定ぬかた

(以上二編上の二の上の二はあき等の巻に
勝こ小本別に用本あり)

○おてん
茂系慶八卦柱曆
を高の小題大経師

昔曆室永三成年九月廿百八前當我扇八景と
段め迄の狂言を近松門たすの作中又貞亨
元子年（一）廿三年一月廿好て狂言と有りたり
其後元文五申年十月十日百前百日常我の
切に近松翁十七回忌追善狂言也一と忠八封
在曆と外題を呼かして有りは時々一素永四
亥年まで百廿二年一なるは貞亨元一
はるき一八年一なる昔お清一

評に曰道行の曆の中段を尋たると平安
堂の翁が例の戯れとは言わねら感ず一

近松翁お勤く堂上方に仕へん一と云は
すて上の巻の枕も文勢ひ怪なり下有て
おもゝろく鏡の権三を帷子を忠八封
の表を作せしもの何れある甚治御あり
数々の内は印と遊白の如くのものも
のちれど近松翁は遊白一ありた大経師
の作歌并伎もろく一改曆又京仁形
昔曆ちも少一たの坊補を必しも是れを皆は
忠八封一と出たもの

(以上三端の中一、二はおきと幸印別に字す)

○嘉平次 生玉心年 及び徳五未年八月朔り
あさが

ト中平座を近松門たより作前持統天皇
歌軍は近松名譽の作国性都はけ年の冬
にして今嘉永四年夏下百廿七歳と成り
詳に曰 け年五月廿日の夜の心中をては既作
阪所を伏見阪と唱へしと見たり文中に柏屋
を阪河南側と見え東通うを烟をて堂屋三
勝心中より廿余年後と云ふは伏見阪所を
南側七所節は右側の千連宗有て跡を

皆畑をて有し中 ありけし 吾れ河合年
リ十三甲後をておの地甚たを嵐は歌
舞ぬるをありとと物に行たりと上巻
二有都ては節の心年とらば常報はに
久く嶋の内坂所にをまれくとも有しと思はる
只陽気浮気のみにて心中懐死のサキを
思へばおの地の下をくは懐かると思はる嶋の
内におも総は島東十三金中三勝半七
松所をては介よおまの節と中おいとを
松の千名をて及は松堀よ岩井凡んの人

加^ハ一^ノ書^ヲ三^ノ年^ハ情^ニ入^リと^シ稀^ク

(以上五卷上の一、二、三、松久、松山は別入守本有)

○山崎与次郎

家^ノ名^ヲあ^ラせ^テ

書^ハ門^ノ松^ニ 是^レ享^保三^年正^月二^日

より本在作者近松門丸本口今嘉永四亥
年迄百三十四年と成り

評^ニ曰^ク此^レ狂^言は^ハ八^年後^昔米^万石^通濠^後
放^駒出^又是^十五^年迄^て双^蝶々^曲輪^日記^の狂^言
言^出る^万石^通と^書門^松を^一の^狂言^とせ^し
委^くは^傳奇^作書^後集^に有^ると^す

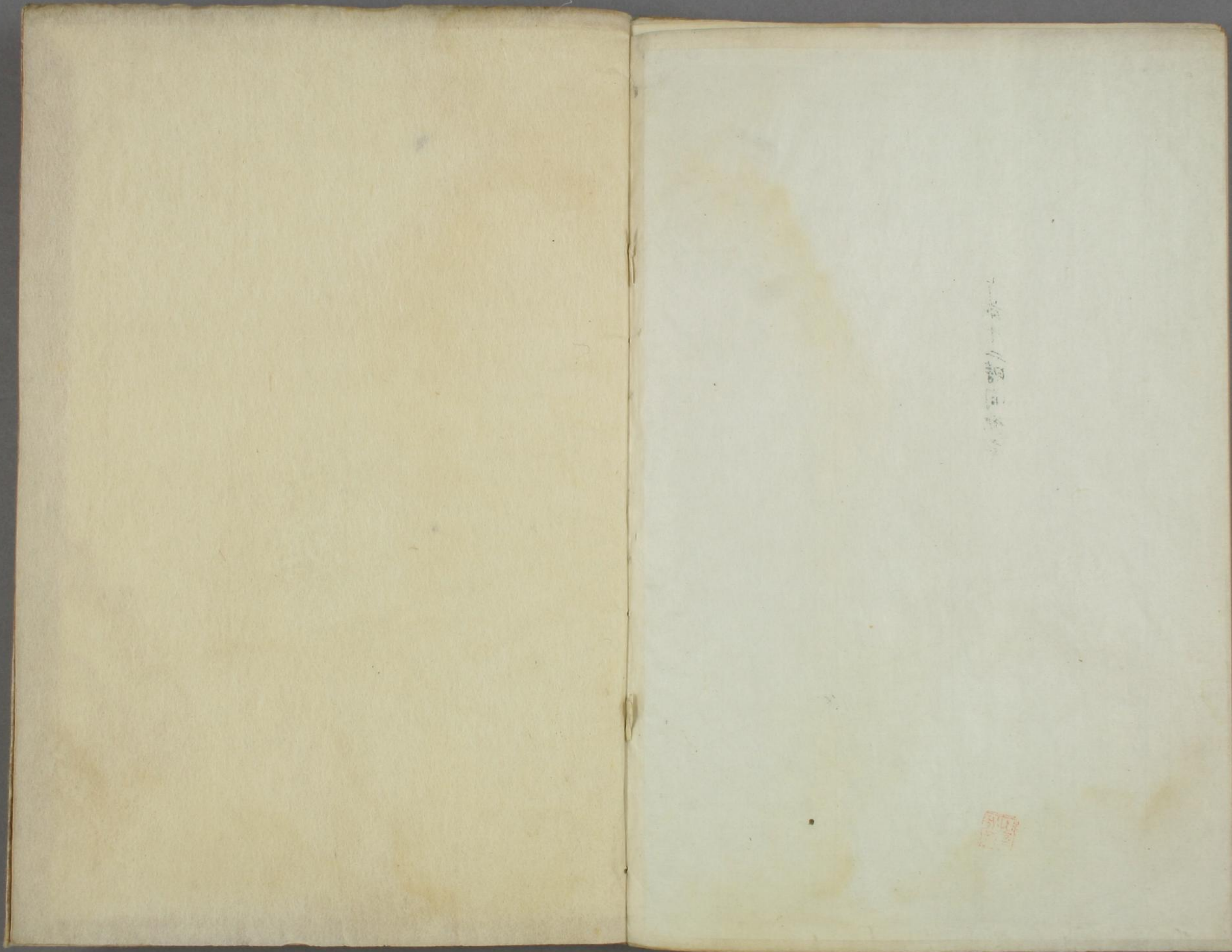
心中侯の玉の井は元禄十五年一月廿八日

より豊作此紀情音作は冬極月十四日義士夜

討の年今嘉永四亥年迄百五十年と成り

(以上六卷上の巻、侯の玉の井は別入守本有)

他^しは^守本^とは^ハ同^じに^ハ古^書と^して^ハ子^所々^に
中^の卷^一別^つる^守本^とは^ハ同^じ



二〇一〇年一月



